

サツマイモ研究を離れるにあたって

農研機構 九州沖縄農業研究センター 畑作研究領域長

おやなぎ あつし
小柳 敦史

私がサツマイモの研究を始めたのは今から38年前のことである。その頃は、青果用のサツマイモの産地でポリエチレンマルチ栽培が普及しはじめ、早期肥大や多収化、雑草防除に大きく貢献したがその反面、いもの形が悪くなったり、表面が割れたりくぼんだりして商品価値が下がるという問題が起こった。そこで、当時、原因が分からなかった塊根裂開症の発症要因の解明に関する研究を行ったのだが、この問題は今もまだ解決しておらず、現場で困っている問題を研究で解決することの難しさを感じた。

3年間サツマイモの塊根裂開症の研究をした後、私は麦の研究に移り27年間、麦の湿害などの研究を行った。ところが、これも解決が難しい問題で、現在でも我が国の麦は湿害に苦しめられている。そして、サツマイモの研究に戻ったのは今から8年前で、宮崎県都城市にある農研機構の研究拠点でサツマイモの品種改良や機械移植技術の開発について研究の調整などを行った。

このように私は偶然にもサツマイモと麦を研究の対象にしてきたが、実はサツマイモと麦はもともと相性の良い作物である。と言うのは以前、関東ではサツマイモの畦間に麦を間作することがよくあった。また、九州ではサツマイモと麦の輪作が行われていた。それがその後、北海道を除く全ての

地域において畑で麦が作られることがなくなり、それに伴いサツマイモは単作化し、連作されることが多くなった。

そのような中で、2018年に我が国で初めて九州沖縄地域でサツマイモ基腐病が確認され、現在も発生地域が拡大しつつある。都城研究拠点では関係各県の研究機関とともにその発生生態と防除対策について研究してきたが、今も産地によっては極めて厳しい発生状況にある。このサツマイモ基腐病は土壌病害であり、連作障害のひとつで、海外では以前から発生していた。最近になってなぜ我が国でも発生し、ここまで拡大しているのかは不明だが、私は産地における担い手の高齢化や労働力不足で排水等の圃場管理が行き届かなくなっていることに加えて、麦との輪作が行われなくなり、土壌の健全性が失われてしまったことも発生要因のひとつではないかと推測している。

この四半世紀を振り返るとサツマイモはいも焼酎ブーム、焼きいもブーム、紫いもブームなど明るい話題が多かったが、ここに来てサツマイモ基腐病という大きな困難に直面している。私はサツマイモ研究から離れるが、これからのいも類の関係者で力を合わせて、この困難を乗り越えていただきたい。この病気が一日も早く終息することをお祈りする。